

駒生道下塚

—宇都宮市立仮称第58小学校敷地内発掘調査報告—

昭和60年1月

宇都宮市教育委員会

序 文

今日、宇都宮市は、北関東の代表的都市の一つとして発展を続けておりますが、発展すればするほど問題点も多くなってまいります。これは“子供が成長し、大人になるにつれて悩みが増える”と同じことなのでしょうか。

本市が抱える問題点の一部は、当然のことながら当教育委員会が負わなければなりません。現在、大きな悩みの一つに学校新設問題があります。これは人口が増加し続ける本市にとっては逃れられないことです。

今年度は56番目的小学校として新田小学校、57番目として海道小学校が開校いたし、来年度には仮称第58小学校を新設する予定です。

ところが、今年度開校の新田小建設用地には「針ヶ谷新田古墳群」の一部が含まれており、昨年度記録保存のために調査をいたしました。今年も来年度開校予定の仮称第58小学校新設用地に、「駒生道下塚」が含まれることになり緊急調査をいたすことになりました。

当教育委員会の教育行政の大きな柱の一つに“文化財保護の重視”を掲げており、特に公共事業については、郷土の先人が残した貴重な文化財との関連を必ずチェックし、万全の体制で事業を推進しております。

本調査は豊富とはいえない予算で実施した緊急発掘ですので、不十分な点が多くあると思います。

したがって本報告書も十分な内容とはいえないと思われますが、先学諸氏にご活用いただければ幸いと存じます。

昭和60年1月

宇都宮市教育委員会

教育長 後藤一雄

例　　言

- 本報告書は、宇都宮市駒生町内に所在する「駒生道下塚（宇都宮市立仮称第58小学校建設用地内）」の発掘調査の報告書である。
- 発掘調査は、宇都宮市教育委員会が主体となり昭和59年12月17日から22日にかけて実施した。
- 本報告書は、定岡明義が執筆、編集した。
- 本調査の関係者は次のとおりである。

主　　体　　者	宇都宮市教育委員会	教　　育　　長	後藤　一雄
事　　務　　局	◆	社会教育課　課　　長	加藤　悦男
◆	◆	◆　文化振興係長	小林　錦一
◆　(担当者)	◆	◆　◆　指導主事	定岡　明義
◆　(　◆　)	◆	◆　◆　主任主事	手塚　英男
◆　(　◆　)	◆	◆　◆　◆	梁木　誠
◆	◆	◆　◆　◆	阿部　信弘
調　　査　　員	聖山公園遺跡（市営霊園造成地）	調査員	金田　信夫
調査補助員	安生　サキ　　安生　ミカ	小林　マサ　　斎藤　イク	
	佐藤　正男　　島崎　熊夫	福田　カネ　　福田　タイ	
	福田　タイ　　畠田　一夫	松本恵美子　　松本　和子	
	松本　トシ　　松本　トリ	味野和テツ　　森　ヒロ子	
	谷中　一郎　　山崎　トキ	渡辺　フミ	

なお、本調査に際しては、尾嶋利雄氏（栃木県立博物館学芸部長）及び阿久津義正氏（宇都宮市文化財調査員）に御指導を賜った、記して心から感謝の意を表する。

目　　次

●　序　文	宇都宮市教育委員会　教育長　後藤　一雄
●　例　言	
1. 調査の経過	3
2. 位置と環境	4
3. 発掘調査	5
4. 塚の性質	6
5. まとめ	7
6. 図　　版	7

1. 調査の経過

昭和59年10月、人口増加に伴って宇都宮市立の58番目の小学校(仮称第58小)が市西北部の駒生町と宝木町二丁目の境界に新設されることが最終的に決定した。

仮称第58小建設地の現状は、東側が水田で西が山林になっており、同地が学校建設候補地に選定された段階で山林を中心として詳細な埋蔵文化財分布確認調査を実施した。

その時点では、同地内に塚が所在することが確認されていたが、その取り扱いについては学校建設の決定をみてから対応することとした。

建設地に決定後、ただちに学校建設にあたる関係課と塚の扱いについて協議・検討したが、塚の位置に学校施設がかかることになり計画変更が不可能との結論に至り、発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、盛土の3分の2を失なって精円形に近い形で残存している塚を中心とした周囲の現況測量から実施した。その測量図に基づいて盛土のほぼ東西及び南北に幅1mのトレンチを設け、この十文字のトレンチを掘り下げる塚の築造の様子を調べることにした。

発掘調査とともに、旧土地所有者あるいは周辺の古老に道下塚の性質を解明すべく聞き取りを行ってみたが、土地の一部の人によって塚が「金塚」と呼ばれていたという事以外は資料を得ることができなかった。

しかし、聞き取り調査は塚の所在が駒生町(旧城山村大字駒生字道下)地内である事実を生み出し、発掘通知書等で使用した「西岡新田塚」から「駒生道下塚」と改称する基になった。



第1図 駒生道下塚位置図-1



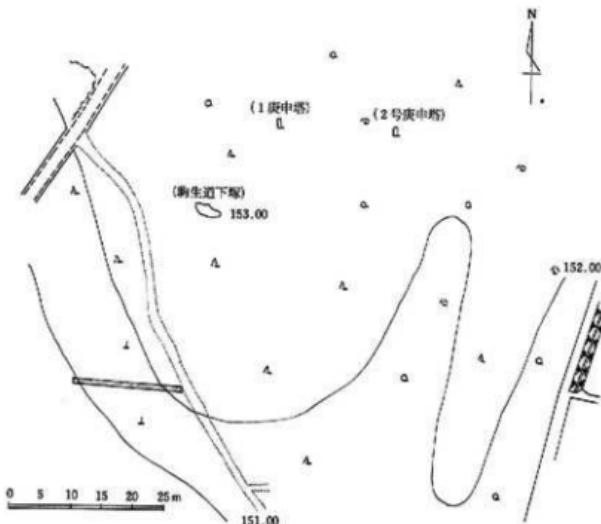
第2図 駒生道下塚位置図-2

2. 位置と環境

駒生道下塚の所在地は、本市街地西北部の新興住宅地に位置しており、すぐ西側を東北自動車道が南北に通過し、東は水田を隔てて市立宝木中学校が新設されるなど近年都市化の波に洗われつつある。

駒生町は、その名の通り古代・中世から駿馬の産地として知られ、江戸時代(天保期)の村石1,000石余で家数25軒という豊かな村であった。その後、駒生村は城山村の大字(明治22年～昭和29年)を経て昭和29年宇都宮市に合併し今日に至っている。

道下塚は、この駒生町の北東端、宝木町二丁目との境に位置しており、塚の周辺には近年地下水を用いた水田も見られるが、水利の便が悪くほとんどが平地林と畠地である。



第3図 駒生道塚周辺現況図

3. 発掘調査

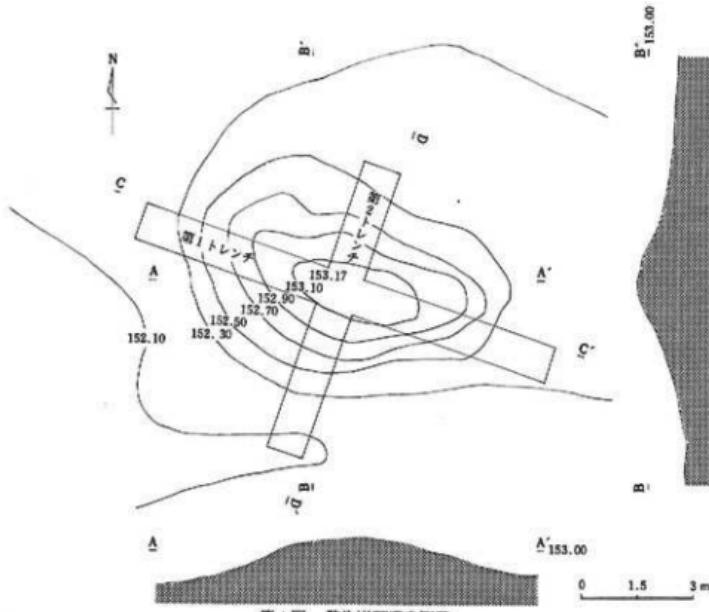
道下塚を実測した結果、盛土部分の現状は南北約6m、東西約9mの橢円形を呈しているが、この塚の築造時の規模は径11m前後の円形であったと考えられる。

トレチの断面は、第5図の通りであるが、道下塚の所在する現況が平地林中であるため表面は15cmから20cmほどの厚さで腐葉土におおわれており、その下の盛土部分は黒色土を積みあげて築いたものであることが確認できた。

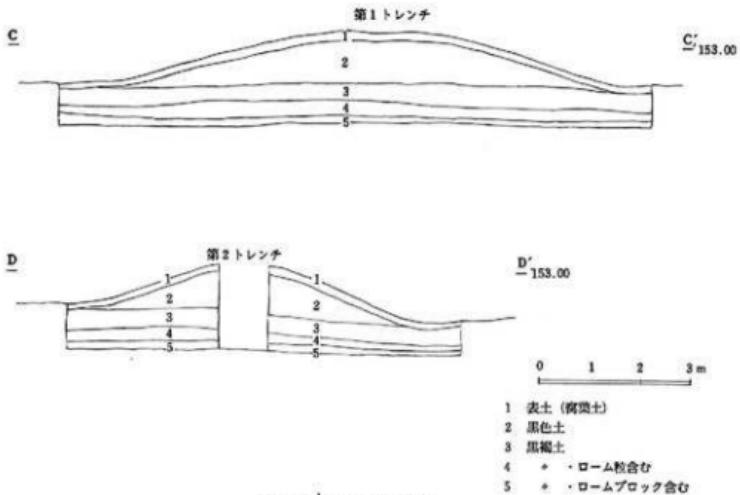
この黒色土は、現在も箱苗代の用土として最適との事であるが、塚が信仰の対象として忘れ去られた時点以後、除々に削り取られていったものと思われる。

いずれにしても、道下塚は、黒色土だけで築かれており周溝も認められないことから、古墳ではなく残存する盛土も築造時の約3分の1にすぎないという事が判明した。

なお、トレチ内からの出土品は、径5cmから10cmほどの玉石が表土に近い黒色土中から5個出土しただけであった。



第4図 駒生道下塚実測図

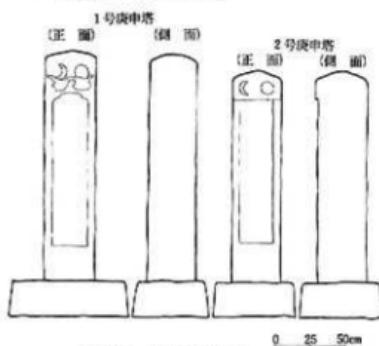


4. 塚の性質

駒生道下塚が、古墳以外の塚であることは発掘調査によって明らかになったが、この塚がいつなんの目的で築かれたかについては、地元の一部の人が「金塚」と称していることしか伝承がないので不明である。しかし、立地条件から塚の性質を類推してみると次の2つの可能性が考えられる。

(1) 庚申塚第3図に示す通り、塚の北東に二基の庚申塔が建っていること、及び本地点が近世駒生村の北東端に位置することによる。なお、今日も同地区には庚申講中が存在している事を付記しておく。

(2) 供養塚・行人塚 かつて本地区に男体講、浅間講等が存在していたことによる。(1)に記した庚申塔二基は、いずれも擬灰岩(大谷石)である。1号庚申塔は正面に「庚申供養」両側面に「天明8年」「11月1日」と陰刻されているが、2号は風化が激しく頭部の太陽と月がわずかに庚申塔であることを物語るだけである。



5. ま と め

宇都宮市教育委員会では、昭和53年から57年にかけて市内の遺跡の一斉調査を実施したが、その結果古墳以外の塚を204基確認している。しかし、未確認の塚もかなりあると思われその実数は、はるかにこの数を上まわると考えられる。古墳以外の塚は、古墳ほど重要視されない現状にあり、時によっては人知れずその姿を消すこともある。

多くの場合、中世以降の塚は民衆の素朴な信仰の中から生まれてきたものであり、庶民の切実な願いがこめられて築かれたものである事を考へる時、そうした先人に思いを寄せると共に塚そのものを大切に扱うことが必要であろう。

駒生道下塚は、小学校建設が進む段階で残存する盛土も削平されるであろうし、塚の北東に建てられていた二基の庚申塔はすでに学校建設地外に移されている状況を見る時、今回本報告書にその記録を止めたことは、これ等を造立した人々の心情に少しは答えることになるのではないかと考えている。

6. 図 版



発掘調査前（南から）



第1トレンチ西側(西から)



第1トレンチ東側(西から)



第2トレンチ(南から)



1号庚申塔



2号庚申塔